

社会 第5学年 工業生産とわたしたちの暮らし 授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。日本文教出版の年間指導計画にある「これからの工業生産」に対応した独自案。教材本文・挿絵・問題文は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

本案で見るのは、児童が「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」に対し、資料の事実と考えを区別して答えられるかである。工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良しているというまとめを暗唱できるだけでは、本時の目標に届いたとは判断しない。安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。根拠の指し示し方や説明の修正を見ることで、教師は次に何を確かめればよいかを判断できる。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第5学年〕(3)	(3) 我が国の工業生産について、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。
〔第5学年〕(3)ア(7)	(7) 我が国では様々な工業生産が行われていることや、国土には工業の盛んな地域が広がっていること及び工業製品は国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解すること。
〔第5学年〕(3)ア(エ)	(エ) 地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめること。
〔第5学年〕(3)イ(7)	(7) 工業の種類、工業の盛んな地域の分布、工業製品の改良などに着目して、工業生産の概要を捉え、工業生産が国民生活に果たす役割を考え、表現すること。

単元の目標

工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良していることを理解し、地図・写真・統計・説明資料と調査記録を扱う技能を身に付ける。「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」を追究し、根拠を基に考えを表す。自分の記録を見直し、分からないことを確かめながら学習に取り組む。((3))

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良していることを理解している。 ②地図・写真・統計・説明資料と調査記録について、対象、条件や時期、調べて分かったことを区別して記録している。	①「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。	①これからの工業生産の学習で生じた疑問について、自分の記録や友達のことを基に調べ方や説明を見直し、解決しようとしている。

単元の流れ

日本文教出版の年間指導計画の配当「全5時間」を参照。全5時間はcatalog収録の標準配当。以下の各次への配分と本時の位置は本資料の授業案であり、出版社の授業配当の転載ではない。学校の年間計画と観察・調査の進み方で調整する。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
第1次	1	○工業の既習からこれからの課題を出す。 ○製品改良と社会の変化の事例を調べる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第2次	2	○消費者の願いを資料で確かめる。	知①・知②（記録・活動の観察）
第3次	3	○生産者の工夫と困難を整理する。	知①・知②（記録・活動の観察）
第4次	4 (本時を含む)	○優先したい取組を立場を変えて検討する。 ○安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。	思①（個人の説明・記録）
第5次	5	○工業の発展について自分の考えを述べる。	態①（記録の見直し・振り返り）



本時の案

本時の目標：「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、資料の事実を示しながら自分の考えとその理由を説明できる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 (分)	○前時までの記録から「工業の既習からこれからの課題を出す」ときの疑問を取り出す。 ○「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」 【めあて】調べた事実を使い、自分の考えと理由を説明しよう。 ○一人で予想と理由を書き、調べたい点を確認する。 〈予想される児童の反応〉 ・工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良しているのか確かめたい。 ・前の記録と比べると違いが見つかりそう。	・答えを先に示さず、児童がどの記録を根拠にしたかを尋ねる。 ・企業の広告表現をそのまま評価語にしない。現状の数値は年・単位・対象を付けて扱う
展開 (分)	○前時までの観察・調査の記録を使う。以下に示す調べ方を振り返り、本時は問いに関係する記録を比較する。追加の実験・調査は方法を計画し、次時に確認する。 ○安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。 ○「どの資料の事実から、そう考えましたか」 ○自分の説明を相手に示し、根拠が同じか違うかを比較する。 ○説明できない記録があれば条件や資料の読み方を確認し直す。 〈予想される児童の反応〉 ・同じだと思ったが、比べるところをそろえると違いがある。 ・この記録だけではまだ決められない。 ・生産者の工夫と困難を整理することで、理由を確認したい。	・便利ならよいという主張には製造費用や資源、使えない人の立場も資料から考える。技術だけですべて解決すると断定せず、協力や制度の条件を残す ・結果に合わない意見も記録へ戻す材料として取り上げ、発言した児童を責めない。 ・比較が難しい児童には記録の対応する箇所を指し示し、まず事実を口頭で説明させる。 ・本時に単元全体の実験や調査をやり直さない。比較する記録を準備し、方法を確認する必要がある部分だけを実物で示す。 ◎思①「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」について、人々の働きや資料同士の関係に着目し、根拠を挙げて説明している。（個人の記録と説明。交流前後の変更理由を含めて見る。）

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
まとめ （ 分）	○本時の問いへの答えを、根拠となる資料の事実とともに書く。 【まとめ】工業は国民生活を支え、需要や社会の変化に応じて技術や製品を改良している。 ○最初の考えから変わったことと、まだ調べたいことを記録する。 〈予想される児童の反応〉 ・考えが変わったのは、記録を比べたときに違いを見付けたから。 ・まだ確かめていない条件が残った。	・まとめは確認した資料の事実を根拠に書く。資料によって見方が分かれる場合は、作成時期・立場・対象を確かめ、未確認の点を残す。 ・振り返りで分かった支援の必要な点は次時の活動に反映する。 ◎知①（まとめの説明）／態①（記録を見直す過程。発言回数や文章量だけで判断しない。）

板書の構造

上段に「これからの工業生産」と本時の問い「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」。左側に予想とその理由、中央に実際に調べた事実の記録、右側に事実から考えた説明を置く。中央は条件・時期・対象が分かる見出しにし、比較する記録を同じ高さに並べる。生産者の工夫と困難を整理する際に用いた記録を残し、根拠と説明を線で結ぶ。下段には確かめられたことと、まだ残る問いを分けて置く。発言の多い子の説明だけで仕上げず、個人の記録の違いを残す。

つまづきやすい所と手当て

便利ならよいという主張には製造費用や資源、使えない人の立場も資料から考える。技術だけですべて解決すると断定せず、協力や制度の条件を残す

準備するのは、学級で使う実物や資料と、対象・条件・時期を対応させて残せる記録用紙である。教師は事前に資料の出典や器具の働きを確かめ、児童に渡す記録と教師の説明を区別する。企業の広告表現をそのまま評価語にしない。現状の数値は年・単位・対象を付けて扱う

本時の評価で説明と根拠が結び付かない場合は、言葉を追加して教え込む前に、比べる対象がそろっているかを見直す。口頭では説明できるが記述が難しい場合は、図と指差しも証拠として残す。

プリントの案

これからの工業生産の問いと記録

上段は「調べたいこと」と「最初の考え・理由」。中央は対象、条件・時期、分かった事実、確かめた方法の欄。安全、環境、使いやすさ、生産の継続に関わる製品改良の事例を調べる。消費者・働く人・企業の立場で利点と必要な条件を整理し、これから大切にしたい取組を根拠付きで選ぶ。下段に事実から考えた説明と残った疑問を書く。教材本文・写真は印刷せず、利用できる実物や公的資料の出典を書き入れる。

説明を確かめ直すカード

問い「これからの工業には、使う人と作る人の両方から何が求められるだろうか」への自分の答え、根拠の記録、友達の説明との共通点・相違点、修正した箇所と理由の欄を設ける。修正しない場合も根拠を確認した理由を書く。文字を書く代わりに図や口頭説明の記録も使える。

出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）。本文は取得済みの文部科学省表V1.2と照合。

（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）／国立教育政策研究所「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校社会。評価の観点と記録を用いる考え方を参照。事例の文章は転載していない。

（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_shakai.pdf）／日本文教出版年間指導計画。単元名・配当時数・掲載時期の出典。（https://www.nichibun-g.co.jp/textbooks/s-shakai/download/r6/r6_shakai_nenkei_5.xlsx）

AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)

https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

